



Special Interview

Laura Ainsworth

ローラ・エイズワース インタビュー

聞き手：編集部

テキサスで活躍するレトロ・ジャズシンガー、ローラ・エイズワース。グレート・アメリカン・ソングブックを説得力のある形で色鮮やかに再生し、過去に数回レコーディングされたのみの、古いレアな曲を見つけては息を吹き込んでいる。彼女の音楽は昨年日本のジャズ・ファンに紹介され、LPでのみリリースのコンピレーション『Top Shelf』(2017年)がディスクユニオンより流通販売された。今年、ラッツバック・レコードより、これまでに発表された全アルバムの日国内流通が始まる。

今回発売されるアルバムは、CD『Keep It To Yourself』(2011年)、『Necessary Evil』(2013年)、『New Vintage』(2017年)と、前述のLP『Top Shelf』(2017年)の4作品。ローラに、各アルバムと今後の活動予定について語っていただいた。

——ジャズ・シンガーを志したきっかけを教えてください。

LA 私の家族はみんなジャズを演奏していて、父のビリー・エイズワースはその技巧で当時のアメリカのミュージシャンたちから尊敬されていました。父はクラリネット、アルト/テノール・サクソ奏者で、ビッグ・バンドの編曲も行っていました。当時、友達がみんな流行のポップスやロックを聴いている中、私は最高のジャズ・ミュージシャンの歌や演奏を聴いて育ったものだから、生まれる年代を間違えたと思いましたね。私が初めてパフォーマンスしたのはミュージカルで、主にロジャース&ハマースタインのクラシックな演目でした。そのとき、これこそ私がやるべき音楽だと確信したのです。今はロジャース&ハートのほうに関心がありますけれど。

——1作目『Keep It To Yourself』はどのように生まれたのですか？

LA レコーディングの案は長い間あったのですが、CDを作るならエラ・フィッツジェラルドやキーリー・スミスのリイシュー盤と同レベルでなければと思い、作業に取りかかれる環境が整う2011年までずっと待ちました。

それ以前にブライアン・パイパーと仕事できたのは幸運でした。彼は私のライブやコメディ劇『Ship Has Sailed』の音楽ディレクターで、『Keep It To Yourself』制作の話が持ち上がったときはエキサイトしていましたね。制作に向けてノーステキサス大学ジャズ研究学科で教鞭を執るトップ・プレイヤーたちを連れてきてくれて、彼らの多くが今は亡き私の父と演奏経験がありました。ブラ

イアンはプロデューサーとしてだけでなく、熟達したキーボード奏者でもあるので、ダラス周辺では引く手あまたです。このアルバムは小規模なインディーズのリリースにも関わらず、素晴らしい評価をいただき、世界中のラジオでプレイしていただけたので驚きました。

——2作目『Necessary Evil』では1作目のテーマを深く掘り下げました。

LA 1作目を制作する過程で、私の自然なパーソナリティーの一部を発見する機会がありました。私は1940年代のフィルム・ノワールのファンで、それらの映画が持つウィット、暗さ、官能が混ざった雰囲気が大好きなのです。私が魅了された曲の数々は、それらのブレンドといえるでしょう。「Keep It To Yourself」という曲はまさにそう。1作目の最初にレコーディングした曲で、それを軸にアルバムを制作していきました。また、クラシックに分類される曲も好きですが、そのまま再現するよりも新しい要素を織り交ぜるのが好きで、だから私の音楽は「ニュー・ヴィンテージ」と呼ばれるのです。そのため私は一度「うまくいった」ものを2作目でも続けることを選び、それは正しかったと感じています。

1950年代にエラとフランク・シナトラがやったように、忘れ去られた古い名曲を見つけて私独自の音で甦らせることも、もちろん大事です。2作目の収録曲、フィルム・ノワール風味の「One More Time」は見過ごされた名曲のひとつでしょう。この曲はフランク・レッサー作で、1930年代初頭に数回レコーディングされたのみです。

——3作目『New Vintage』のリリース後に「ヴィンテージ」ファン、「ティキ」ファンを獲得しました。それらはどのような人たちですか？

LA 「ヴィンテージ・ムーブメント」は、20世紀初期から中期の欧米文化を愛好する人々のことで、2010年代のテレビドラマシリーズ『Mad Men』の人気にともない増えていきました。「ティキ・リバイバル」は、ミッドセンチュリーのティキ文化、エキゾチックでトロピカルな地域のライフスタイルへの憧れが近年高まったものを言います。ティキ・リバイバルにはエキゾティカ音楽、マイタイやゾンビなどのトロピカル・カクテル、パンブーハット、ティキ神像、ティキトーチといった装飾の人気復活も含まれます。

私自身、ヴィンテージ・ムーブメントとティキの愛好家で、ヴィンテージの服を好んで着ますし、家のインテリアも本物のミッドセンチュリーのデザインです。私の地元には「ダラス・ヴィンテージ・ソサイエティ」というグループがあり、メンバーのみなさんが1940年代風の衣装を素敵にまとって、3作目の1曲目「That's How I Got My Start」のミュージックビデオに出演して下さっています。その一方で、私のタイムカプセルである1955年に建てられた自宅は、どんどんティキでトロピカルな雰囲気になっています。その理由のひとつは、13羽の保護したインコ・オウムたちでしょう。彼らの歌声のおかげで、まるで南国の島小屋の中にいる気分です。その中の1羽を手に乗せてポーズを取っている写真を、1作目のジャケットの裏面に使用しています。

——LP『Top Shelf』を制作したのは、アナログ盤の人気復活を意識して？

LA はい、まさにそうです。アナログのテクノロジーは私が歌う音楽に「フィット」していますし、多くの人々がそれに回帰していることにワクワクしています。昔、キャピトル・レコードやヴァーヴ・レコードが作っていた、真のアナログLPを作ることが夢でし

た。フランク・シナトラ、エラ・フィッツジェラルド、ナット・キング・コール、ベギー・リー、ジュリー・ロンドン、ローズマリー・クルーニーといった伝説の方々が発表したような。私は「到達」できたような気がしています。

——今後リリース予定の『Top Shelf』CD版と既存のLPとの違いは？

LA 尋ねてくださってうれしいです。まず、曲数が増えます！ CDには厳格な再生時間の制限がありませんから、LP盤制作時に泣く泣く収録を諦めた大好きな曲を収録することができました。また、ボーナストラックとして「You'd Be Surprised」という曲を追加します。これは2作目『Necessary Evil』の制作中に録音したもので、今までどのCDにも収録されていない未発表曲です。

——ラッツバック・レコードとのこれまでの関係は？

LA 私の日本に向けたプロモーションの代理人であるデイヴィッド・ガスティンの会社、スウィング・シティー・プロダクション経由で今回の流通が決まりました。ラッツバック・

レコードはよくしてくださっています。ガスティンはジェーン・ハーヴェイやモニカ・ルイスといった、クラシックなジャズ・シンガーのCDコレクションの日本国内流通に向けても動いています。モニカの自伝はいつも私のコーヒーテーブルの上に置いてありますが、そういったシンガーたちの一員になったようで光栄です。

——日本のマーケットに向けて、今後の活動予定を聞かせてください。

LA そうですね、最優先事項は日本でライブ・パフォーマンスをすることです。アメリカ人ヴィンテージ・ジャズ・ミュージシャンやラウンジ・ミュージック・アーティストの一員としてでもいいですし、現地の優れた日本人ジャズ・ミュージシャンと一緒にパフォーマンスできたらいいですね。それまでは、制作を予定している2枚のCDに向けて曲選びをします。ひとつは「タイムトラベル」をテーマにしたもの、もうひとつは「You Asked For It」というタイトルで、よくリクエストされる曲を集めたアルバムになります。こちららどうぞお楽しみに。

ローラ・エインズワース ディスコグラフィ

すべてアメリカ輸入盤、2020年3月25日よりラッツバック・レコードより流通販売開始。*のみ2020年4月22日より流通販売開始。

スタジオ・
アルバム

コンピレーション・
アルバム



『Necessary Evil』
(Eclectus Records ER1002/
CD / 2013年)



『New Vintage』
(Eclectus Records ER1003
/ CD / 2017年)



『Keep It to Yourself』
(Eclectus Records CD,
ER1001.2011年)*



『Top Shelf』
(Eclectus Records ER1004
/ 180g LP / 2017年)